〔1369〕

氏名（生年月日）	曾（ソ）　文（ブン）　莉（リー）（1988 年 5 月 7 日）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博甲第 143 号
学位授与の日付	2021 年 3 月 17 日
学位授与の要件	中央大学学位規則第 4 条第 1 項
学位論文題目	**台湾映画における日本の表象の変遷（1895-2015）**
論文審査委員	主査　飯塚　容 副査　榎本　泰子・山口　守

博士学位（甲）請求論文審査報告書

Ⅰ．本論文の主題

本論文は、台湾が日本の植民地となった 1895 年以降、戦後の国民党政府による強権統治の時代を経て、「台湾ニューシネマ」の誕生、そして「ポストニューシネマ」の 2015 年までの間に制作された、あらゆるジャンルの台湾映画を研究対象として、映画の中に現れる日本の表象を抽出し、その変遷を詳細に分析したものである。この作業を通じて、中国や韓国と比べてより「親日」的だとされる台湾における日本の表象の特殊性、およびその特殊性が形成される過程を明らかにした。また、日本の表象の変遷と台湾人のアイデンティティーの変遷との関係についても、映画を手掛かりにして検証している。

Ⅱ．本論文の構成

第一章　序論

　第一節　本土思潮と台湾人のアイデンティティー

　第二節　論文の構成

　第三節　先行研究と論文の独自性

第二章　1895 年－1945 年の植民地台湾で撮影、制作された映画における日本の表象

　第一節　植民地台湾で撮影された記録映画

　第二節　植民地台湾で制作された劇映画

　第三節　この時期の映画における日本の表象

第三章　1950 年代から 1960 年代に台湾で制作された劇映画における日本の表象

　第一節　戦後台湾における映画の発展（1945 年から 1969 年まで）

　第二節　日本の表象が登場する映画

　第三節　この時期の映画における日本の表象

第四章　1970 年代に台湾で制作された劇映画における日本の表象

　第一節　1970 年代の台湾における映画の発展

　第二節　日本の表象が登場する映画

　第三節　この時期の映画における日本の表象

第五章　1980 年代の台湾ニューシネマにおける日本の表象

　第一節　郷土文学と台湾ニューシネマ

　第二節　日本の表象が登場する映画

　第三節　台湾ニューシネマにおける日本の表象

第六章　ニューシネマ以外の 1980 年代の台湾映画における日本の表象

　第一節　ニューシネマ以外の 1980 年代の台湾映画の発展

　第二節　日本の表象が登場する映画

　第三節　ニューシネマ以外の映画における日本の表象

第七章　1990 年－2007 年の台湾映画における日本の表象

　第一節　1990 年から 2007 年までの台湾における映画の発展

　第二節　日本の表象が登場する映画

　第三節　この時期の映画における日本の表象

第八章　2008 年－2015 年の台湾映画（ポストニューシネマ）における日本の表象

　第一節　2008 年から 2015 年までの台湾における映画の発展

　第二節　日本の表象が登場する映画

　第三節　この時期の映画における日本の表象

第九章　結論

　第一節　台湾映画における日本の表象の変遷

　第二節　映画から見る台湾人のアイデンティティー

　第三節　今後の課題

Ⅲ．本論文の概要

序論では、まず台湾の文学思潮の流れを踏まえ、台湾人のアイデンティティーの変化を概観したあと、本論文の構成、先行研究にはない独自性について説明している。

第二章は、植民地台湾における映画の発展を考察したあと、この時期に制作された映画に描かれた日本の表象を取り上げて分析している。記録映画には二種類があり、一つは日本人に見せるもので教化の成果を強調していること、もう一つは台湾人に見せるもので日本人が本島人の手本になっていることを指摘した。これらの映画における日本は清潔で、進歩的で、知的な表象であると分析する。一方、植民地台湾で制作された劇映画については、ストーリーや民族相互の関係が類似しているという特徴を指摘した。映画における日本人の表象は単純で、女性はすべて優しい令嬢、男性は主に教化者として登場すると述べる。

第三章は、戦後台湾における映画の発展を踏まえ、1950 年代から 1960 年代に台湾で制作された映画に描かれた日本の表象が果たした役割を考察している。この時期に制作された劇映画は三つに分類できるという。中国の歴史経験を背景とした映画における日本人の表象は固定化されていること、台湾の歴史経験を描く映画は題材が比較的多様であること、そして日本の表象が特別な作用をしない映画もあることを指摘した。

第四章は、1970 年代の社会状況や台湾映画の発展を考察したあと、この時期に制作された映画における日本の表象を取り上げて分析している。中国の歴史経験を描く映画に登場する日本軍が中国人の勇敢さを際立たせる脇役のような存在になっていること、台湾の歴史経験を描く映画が中国人の団結や台湾と中国との血のつながりを訴えることを主な目的にしていることを指摘した。

第五章では、1980 年代の社会状況や台湾映画の発展を踏まえ、いわゆる「台湾ニューシネマ」における日本の表象を分析すると同時に、代表的監督の対日観を比較している。台湾ニューシネマに登場する文化的な日本の表象は多様になった。ニューシネマのテーマは監督たちの個人的な経験と反省が中心なので、それまでの映画とは日本のイメージが大きく異なることを指摘している。

第六章は、1980 年代のニューシネマ以外の映画における日本の表象を取り上げ、ニューシネマとの比較を試みている。ニューシネマではない映画はほとんど戦争が背景で日本の文化的な表象があまり見られないこと、「台湾人が日本に行く」というプロットの目的や結果が単一でないことなどを指摘した。

第七章では、1990 年代の台湾映画が低迷期を迎えた経緯を説明したあと、1990 年から 2007 年までに制作された映画における日本の表象を取り上げて分析する。現代社会を背景とする映画が増え、登場する日本の表象も多様になった。映画に登場する日本人も、ステレオタイプではない役が見られるという。また、日本統治時期に生まれた台湾人でなくても、日本語を話す人が多く登場することを指摘した。

第八章では、2008 年以降の台湾映画および合作映画の発展を考察したあと、ポストニューシネマにおける日本の表象を取り上げ、中国との合作映画と比較している。1990 年代と同様に映画のジャンルやテーマは多様で、登場する日本人により深い人間性が見えることを指摘した。

結論部分では、台湾映画における日本の表象の変遷を整理して、具体的な表象、抽象的な表象、台湾化された表象など項目別にまとめている。最後に、映画から見た台湾人のアイデンティティーの変遷について論述し、台湾における日本の表象の特殊性にも言及した。

Ⅳ．本論文の成果

本論文は、以下の諸点で高く評価できる。

・研究目的、研究方法、テーマの設定、先行研究への目配りにおいて周到な配慮がなされている。また、これまで学術雑誌に発表してきた個別論文と書き下ろしの部分を適切に結合させ、バランスのよい構成となっている。

・所蔵先およびその媒体が様々で入手しにくい過去の作品を含め 600 本あまりの映画をすべて見た

上で、その中から分析対象となる映画を抽出するという作業は、前人がなしえなかった快挙と言ってよい。

・年代を追って各時期の台湾映画を網羅的に検証し、扱っている作品の数が多い。植民地時期やニューシネマに関する先行研究はあったが、1950、60、70 年代の映画についてはこれまで手薄な領域で、その空白を埋める研究として意義が大きい。

・あらゆるジャンルの劇映画を扱い、その中に描かれた日本の表象を抽出している。特に、70 年代の各映画についての分析は内容が豊富である。80 年代のニューシネマ以外の映画も、これまで看過されてきた部分で、新発見の事象が多い。

・歴史的事件を描く映画に込められた現代台湾社会に対する批判や諷刺の分析は、筆者が台湾人であるからこそ気づく視点であり、貴重なものと言える。

・長大な論文を正確な日本語で、わかりやすく執筆している。

Ⅴ．本論文の課題

以下の諸点は、本論文の残された課題として指摘しておかなければならない。

・日本の表象が多い作品も少ない作品も同列に扱われているので、重要と思われる作品の分析がやや物足りない。また、表象に関する記述が中心で、必ずしも各映画の内容全体が伝わらない。

・個別の作品に関する情報（監督、制作会社、資本、配給、主演俳優、使用言語）が不足している。とりわけ、映画における使用言語は重要である。また、現存する映画の所蔵状況、どこで見たかの説明も必要であろう。

・「日本の表象」とは何なのか、それ以前にそもそも「日本」とは何なのか、あらかじめ定義しておくべきではないか。結論における「日本の表象」の分類の妥当性についても、再考する余地がある。

・映画制作者の意図、観客の解釈と筆者の視点のズレを意識した記述が求められる。各時代のコンテクストの相違を確認するために、映画評論や観客の反応に関する資料をもっと利用するとよかった。

・序論における仮説、すなわち「日本人が本島人に見せたい日本」→「中国人が本省人に見せたい日本」→「台湾人が見た日本」という日本の表象の変遷、および台湾人のアイデンティティーの変遷との関係の二点が結論の部分と対応しているか、やや疑問が残る。特に、「台湾人が見た日本」（＝台湾人による主体性の獲得）について強調するべきだった。

Ⅵ．本論文の総合的評価

本論文は若干の課題を残しながらも、台湾映画における日本の表象の変遷を全面的に検証したものとして価値が高く、独自性がある。先行研究の空白を埋めると同時に、今後のこの領域の研究の基礎的資料となることは疑いない。

よって審査委員会は総合的な検討を経た結果、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断した。